

おわりに

以上見てきたように、太平洋戦争がいかに無謀な戦争であったことは明らかである。国力が百倍も違う米国に開戦したことは、現代からみれば信じられないことであるが、日本はそれをやってしまったのだ。

しかも、これが1人の独裁者が出現して行ったことではなく、国としての合意された長期的戦略がなかったこと、および、日本には、ルーズベルト(米)・チャーチル(英)・スターリン(ソ連)のような強力なリーダーが不在のため、その場限りの方針を決めている中に、真珠湾奇襲という暴挙に突き進んでしまった。

それに加えてメディアに踊らされた国民の殆どが戦争に熱狂したことも、満州事変から対米開戦の原因なのだ。

これが日本の恐ろしいところで、戦後の日本の国・企業に依然として残っている大きな問題である。従って今後も、日本は戦争ではないが、同じような過ちをくりかえすであろう。そこで著者は第6章で、この問題を取り上げて今後日本が同じ過ちを繰り返さないように、これらの問題の解決策を提言した。

太平洋戦争では、300万の尊い命が奪われたが、その原因は軍部による人命軽視の考えのためである。航空機・船舶を作るには、多大な費用がかかるが、「兵隊は一銭五厘(郵便はがきの料金)の召集令状で集められる」などと言われていた。前章で述べたように、捕虜取り扱いに関するジュネーブ条約に加盟せずに、「戦陣訓」で勝ち目のない戦いでも玉砕して死ぬことを奨励した結果、戦死者の数を増やしてしまった。さらに、ロジスティクスを考えずに補給が

が追いつかないほど戦線を拡大したので、餓死・病死の数も多くなってしまった。

本書は、昨年米国で生存している元海兵隊員の Richard Meadows と1944年6月15日の深夜にサイパン島に上陸した米国海兵隊に、反撃をして戦死した海軍の市川源吉の日記に基づいた「サイパン島獲得」という英語で出版された本の日本語版である。

日本語版では、その後米国版の出版をきっかけに知り合うことができた、現在もご生存中である陸軍の岡崎輝城さんと海軍の井手口義雄さんの貴重な体験談を取材させて頂き、本書に加えることができた。

本書の米国での英語版の出版は、2012年にロサンゼルスで20年来の知人である共著者の Douglas Westal からの1本の電話から始まった。自らが歴史家であり、小さな出版社のオーナーでもある彼が、近所に住む元米国海兵隊員であった Richard Meadows が日本海軍の市川源吉さんの日記をもっているのを知った。これを英語に翻訳して欲しいとの依頼であった。私は、元日本兵の日記の翻訳だけでは米国人読者には分かりにくいので、当時の日本の政党・政府・御前会議・参謀本部・玉砕・戦陣訓などについてコラムを書いた。

この米国での出版が、日本各地の新聞で報道されたが、市川源吉さんの出身地である静岡では、静岡新聞にも記事が出た。

この結果、日記にもでてくる戦後70年間行方が分からなかった市川源吉の遺児が見つかることになった。当時の慣習に従って、戦争から生きて帰ってきたら正式に結婚式をあげようと、子供が

生まれたのだが、不幸にも市川源吉さんが2度と帰らぬ人になってしまったので、傷心の妻は1歳の幼子連れて、家をでてしまったのだ。その後70年間も行方が分からなかったが、静岡新聞の記事を見た遺児の幼友達の由美子さん(仮名)が、これは紀子さん(仮名)のお父さんに違いないと考え、静岡新聞社にコンタクトして、市川源吉さんの甥の市川洋平さんに連絡をしてきた。

由美子さんが市川洋平さんに電話をしてきて、「私は源吉さんのお嬢さんを知っている。小学校の親友でいまでも年賀状のやりとりがある紀子(仮名)さんです」と言った。

この結果、東北にいる遺児の紀子さんに連絡がとれて、2014年の旧盆に行われた市川家の法事に参加することができた。紀子さんは、母親から「お父さんは戦死した」としか聞かされていなかった。父親の市川源吉さんの日記を読むことができたので感謝した。なかでも、遠くサイパンの戦地で自分の誕生日に、自分のことを書いていることは、涙なしには読むことはできなかった。こうして、70年ぶりの再会のきっかけを作ることができたことは、まさに著者冥利につきるといわざるをえない。

静岡市出身



市川さん子への思い

【サイパン兵隊】1944年6月、太平洋戦争の激戦地サイパン島で戦死した日本兵の日記が、70年を経て日本全国の読者によって公開された。米軍が出土させた「戦死した日本兵の日記はフリレン(仮名)の日記が中心だが、英語での翻訳出版は珍しい。

日本兵3万人以上、民間人8千人以上が死したサイパンでは、米軍の上陸作戦開始から70年となる15日、日本側関係者も出て記念式典が行われる。日記は23巻で戦死した市川源吉・海軍少佐(仮名)・静岡市出身が13年12月か

サイパンの戦い 日記英訳出版



市川源吉さんの写真を見せるおいらの市川洋平さん 4月、静岡市駿河区

ら米軍上陸直前の44年6月まで手紙に書いた。米海兵隊員が海岸で拾い、83年に日本の遺族に返された。米軍に残るコピーを讀んだハワイ在住の経営コンサルタントの公平良(仮名)さんが、70年前の日記を「サイパンの戦い」(仮名)として出版した。書名は「HE TAKING OF SAIPAN」(サイパンの戦い)とある。市川源吉(仮名)の日記は、戦地で使った道具や、戦後、おいらの子供の消息は分からなくなっている。